

古活字版『宗要柏原案立』の修正箇所について

岡 本 梓

2023年11月12日（日）から17日（金）にかけて、関西大学博物館でミニテーマ展「復元日本中世の天台談義所—成菩提院聖教から—」を開催した。同展示では、日本中世に出現した「談義所」と呼ばれる学問寺院での学びに注目し、「柏原談義所」として著名な寂照山円乗寺成菩提院（滋賀県米原市柏原）に伝存する聖教と、近年、関西大学図書館が所蔵するに至った成菩提院旧蔵聖教とを出陳した。

本稿では、展示で取り上げた中から関西大学図書館が所蔵する『宗要柏原案立』（5冊）を紹介する。



図1 『宗要柏原案立』 佛部内題 関西大学図書館所蔵

『宗要柏原案立』は、成菩提院を柏原談義所として整えた中興開山・貞舜法印（1349-1422）が撰述したと伝えられる天台論義書であるが、現在のところ、貞舜の自筆本や貞舜が活動した時期の同題写本は見つかっていない。

関西大学図書館が所蔵する『宗要柏原案立』は、寛永9年（1632）に刊行された古活字版である。本来は佛部・五時部・教相部・菩薩部・二乗部・雑部の6部から構成されるが、関大所蔵本は教相部を欠いている。

5冊ともに四つ目綴じの袋綴装で、法量は縦26.1×横19.0cmほど。表紙には柿洪が塗られており、外題はない。いずれかの補修の段階で表紙・裏表紙の反古紙が抜かれている。本文は漢

字・片仮名。返り点・送り仮名は活字を以て印刷されているが、一部、後から書き加えられたものも確認できる。界線あるいは匡郭はない。本文は丁の表と裏とに11行ずつ、1行あたり20～21字ほどで印字される。

佛部の本文末には「寛永九^{壬申}年應鐘上旬／於延曆寺止観院佛母谷刊摺之訖」、五時部の本文末には「寛永九^{壬申}年應鐘中旬／於延曆寺止観院佛母谷刊摺之訖」とあり、本書が延曆寺東塔止観院北谷で寛永9年（1632）の上旬から漸次刊行されたものであると判断できる。



図2 『宗要柏原案立』 佛部刊記 関西大学図書館所蔵

『宗要柏原案立』本文には文字を修正した痕跡が複数箇所認められる。一度印刷した文字を消し、上から新たに活字を捺した痕跡である。



図3・4

『宗要柏原案立』 佛部 16 丁 関西大学図書館所蔵

『宗要柏原案立』 二乗部 14 丁 関西大学図書館所蔵

従来の古活字版の書誌情報調査では、誤字修正の方法として「胡粉修正」、すなわち誤字に

胡粉を塗り、上から別の文字を記すという方法が報告されている。関大所蔵本も同様の手法を以て修正されたものと考えられる。

以下に、関大所蔵本の各編に見られる修正箇所を示す。なお、修正前の文字を判別できるものについては、括弧内に修正前の文字を記す。

佛部	16丁表 1行目	言 (無)
五時部	17丁表 7行目	異 (意)
	19丁裏11行目	仍
	49丁裏 7行目	ミナ
二乗部	3丁裏10行目	難 (趣)
	14丁表 8行目	乗 (心)
	16丁表 5行目	鬘 (髮)
	16丁裏 4行目	鬘 (髮)
	17丁表 2行目	鬘 (髮)
	18丁裏 1行目	鬘 (髮)
	18丁裏 2行目	鬘 (髮)
	18丁裏 4行目	鬘 (髮)
	20丁表 9行目	鬘 (髮)
	20丁表11行目	鬘 (髮)
雑部	28丁裏 5行目	果
	15丁表11行目	是 (有)
	16丁裏 5行目	几 (ノ)

このうち、二乗部の16丁から20丁に連続する「鬘」は、髮冠を残して「曼」のみ修正されている。これは、「鬘」の活字が不足した際に「髮」の活字で代用し、印刷後に下部の「友」を「曼」に改めたのだろう。

また更に、漢字一字を修正するのとは別に、修正箇所を切り抜き、活字を組んだ短冊状の料紙を裏側から貼りつける方法も確認できる(雑部16丁表1～9字目)。

文字修正の痕跡から、『宗要柏原案立』の出版に際して、本文の校正作業が施されていたと推考する。同書を誤りのない厳密なテキストとして出版しようとする出版者の意図を窺うことができるわけである。

古活字版『宗要柏原案立』が出版された頃、天台宗では、相重なる戦乱や比叡山焼き討ちによって失われた教学の復興が目指されていた。元和以降には徳川家康(1542-1616)の後援を受けた南光坊天海(生年未詳-1643)によって、各地の寺院に伝存する聖教の蒐集・出版が進められている。

古活字版『宗要柏原案立』の出版時期と、当時行われた天台宗復興事業の実施状況とを鑑みれば、『宗要柏原案立』もまた、当時の天台僧侶たちが学ぶべきテキスト、教科書のようなものとして蒐集・出版されたと考えられる。

寛永9年(1632)の古活字版『宗要柏原案立』の出版から13年後の正保2年(1645)には、整版本『宗要柏原案立』が出版される。

整版本の本文は11行20字詰めで、古活字版の本文と比較すると、各論題に番号が振られているほか、行頭に印刷されていた返り点や送り仮名が行末に収まるよう、改行箇所が変更されているといった変化を確認できる。また、古活字版で修正されていた箇所はすべて修正後の文字を採用している。こうした相違から、整版本の版面は古活字版を覆刻したものではなく、より読みやすくなるように整理を加えた上で新たに作成したものであると分かる。古活字版の出版を経て、整版本が出版されたのだろう。

古活字版『宗要柏原案立』については、現在のところ、同じ活字を使用した古活字版や、同じ止観院佛母谷から出版された刊本が確認されていない。古活字版に使用された木製活字は大量に現存しており、今後、調査する必要がある。あわせて、『宗要柏原案立』の成立、さらには出版に至る背景についても、考察を進めたい。

参考文献

- 成菩提院史料研究会 編『天台談義所 成菩提院の歴史』法蔵館, 2018.
- 高木浩明『中近世移行期の文化と古活字版』勉誠出版, 2020.
- 川瀬一馬『古活字版之研究』(上・中・下巻)増補版, 日本古書籍商協会, 1967.
- 京都大学貴重資料デジタルアーカイブ
(<https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp>)
最終閲覧日: 2024/1/24)
- 『宗要柏原案立』6巻(請求記号: 藏/眞/327)
- 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『延暦寺木活字関係資料調査報告書』(本編・図版編)滋賀県教育委員会, 2000.